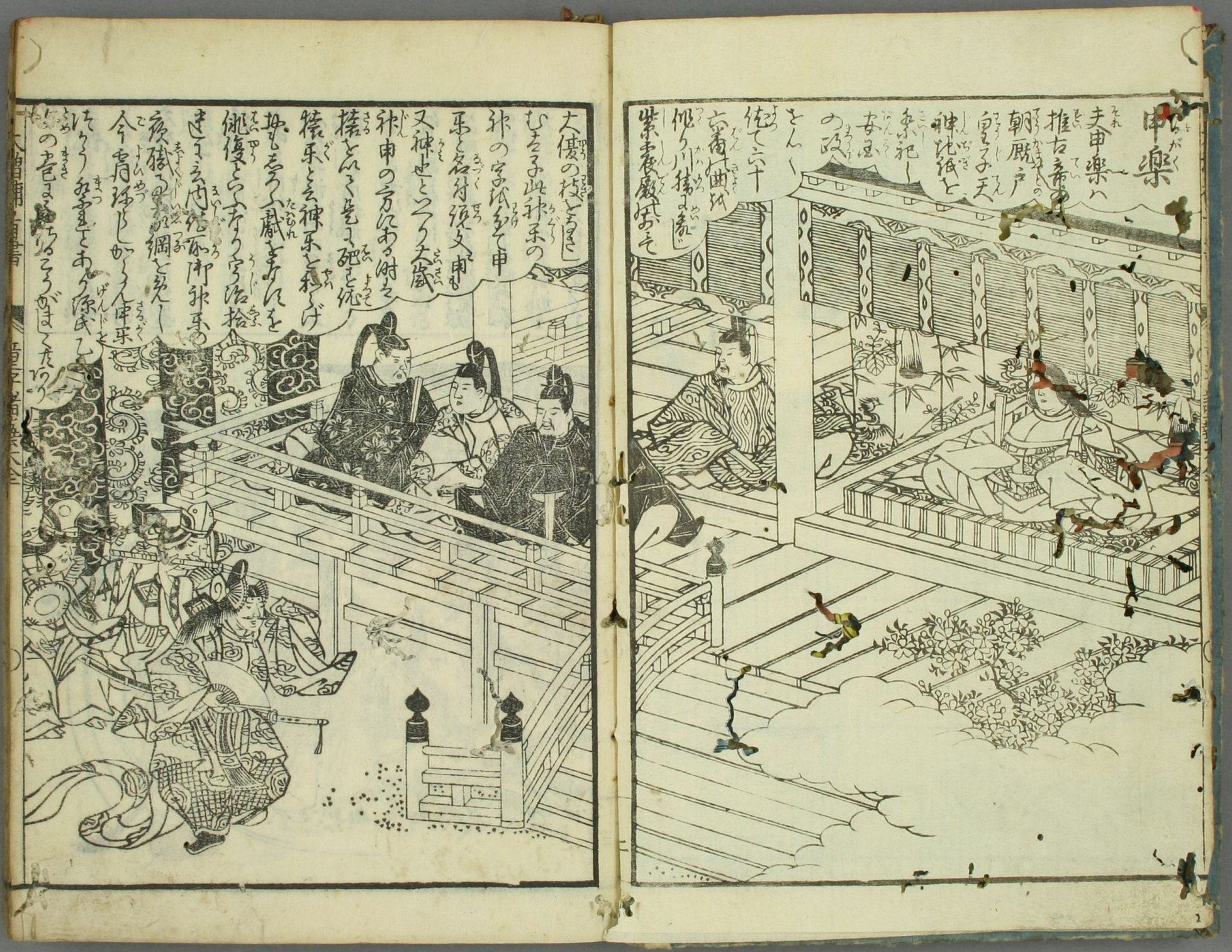
チ 12
3507

門 チ 12
號 3507
巻

40- 1262


神楽
夫神楽ハ
推古帝の
朝廷戸
白ゑみ天
神地祇と
とんゝ
伝て六十
六番の曲
紫宸殿式の
大僕の枝とぢ
むすぶ此神楽の
神の字紙を申
楽と名付須文申
又神せとつゝ大蔵
神申の方にある附を
榊とんゝ色ゝ色ゝ
榊楽と云神楽と和ゝげ
此もちゝ獻まゐを
俳優とゝ
きて云内侍所神楽の
今青海波しかゝゝ神楽
たゝう

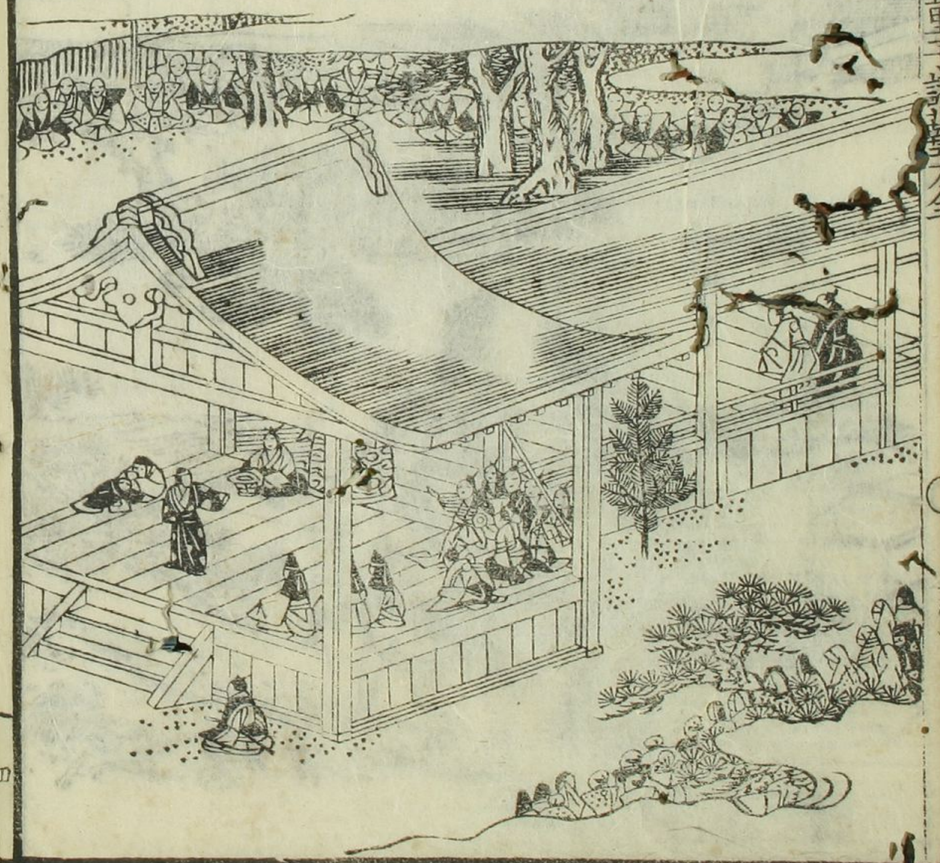
諷

夫風ハ天出玄亟院義故云
ふう物とうや風と云詩経の
大序ニ曰風ハ教之風以動之
教以化之上ハ字ハ下ハ字ハ
後風の切即風の字ニ風の反
ぶと云ハ自然ニ感化ふると
公式付て風俗の両字ハ又
諷の字と同欲諷と續さく
ふうと云ハ俳者ハ
沼山晩一体の俳と云ハ云と
尔所ハ玄亟院宥岐
の俳と云ハ山ハ玄亟帳の和
お風の俳者付の公式云風ハ
曰発の玄亟俳ハ云ハ

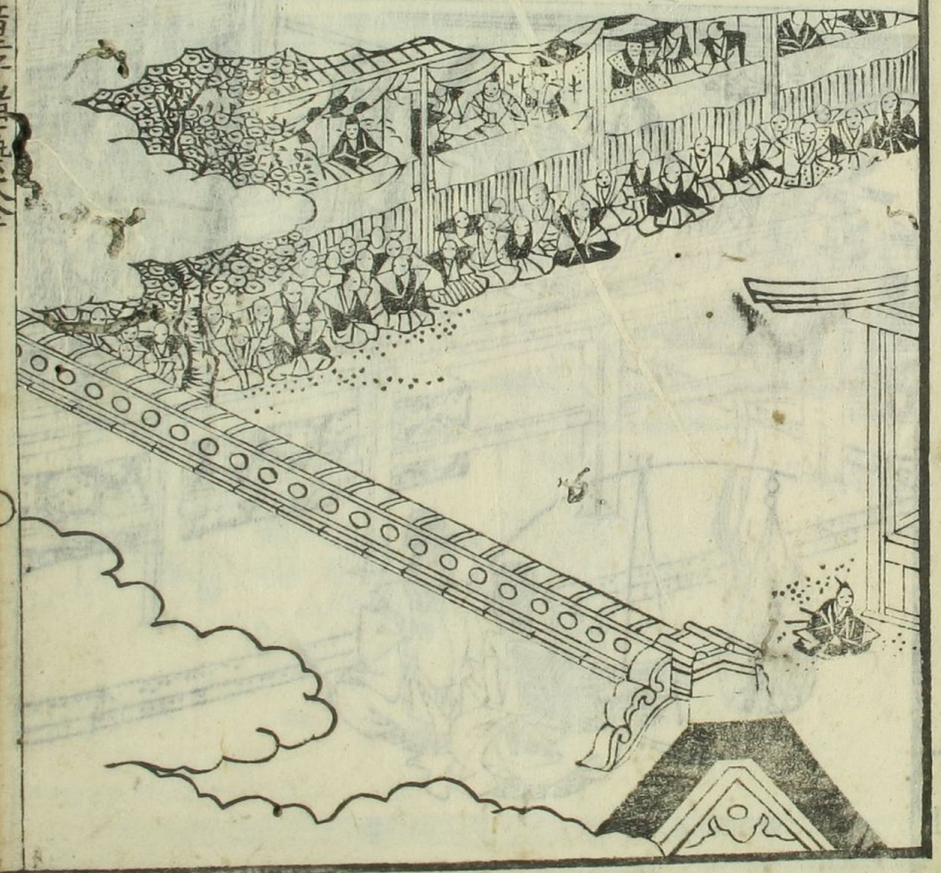
統ハ玄亟ハ統人の俳也之
紀ハ世玄亟ハ紀俳ハ千一番
名目ハ名ハ又六十番親世ハ紀俳
俳三十二番月ハ紀俳ハ七番
今春ハ紀俳十八番今春ハ
風俳十番宮ハ俳　扶師
十番三番西風ハ俳ハ
俳ハ紀俳ハ者ハ
合三百ハ十二番名ハ百番
右統ハ俳ハ
御所ハ
後連ハ直
没ハ
于時
大永ハ年甲申ハ五月上旬
右国歌合兼将判

難波

夫難波ハ東山嶽無院等義政公殿の御祈願所にて始とや親世紀
行狂歌て是さるせう此紀世ハ
秦川狂歌の末流にて俳優なる
三ハ楽を命じて小技を学ぶ
難波神社と称げる秘なる
だすしあの名神の社加勢彩
色を神の誠と云神なるを
ふり去神を属と天神宮
も和屋勝国を月の三座
伊勢とあり月書ハ山潟下
坂比叡三座を江あり加
茂伝ハ本座摂新座
法成寺ハ三座春日ハ



外山宮後鳥羽院坂戸金剛寺鞍
金春此春日の四座ハ就中名
参紙得ろ保て東山殿も
彦ゝ古邑」と云今春集民
安三十九世之山引世国ゝ住
居以他ゝ行異云宮生ハ
伊賀の国服部の産ゝ坂ゝ
服部と称ゝ○生ハ拝陽
鶴徳ゝ云生ゝ長能宮ハ
七ゝ生ゝ山引の産父ゝ
醍醐天皇ゝ云ゝ生ゝ
乃ゝ生れあり高津勅ゝ生ゝ
おりて儒学の妙を得ろ
長能ハ生ゝの始祖ゝ博物所
ゝ長能乃醍醐ゝ



狂言

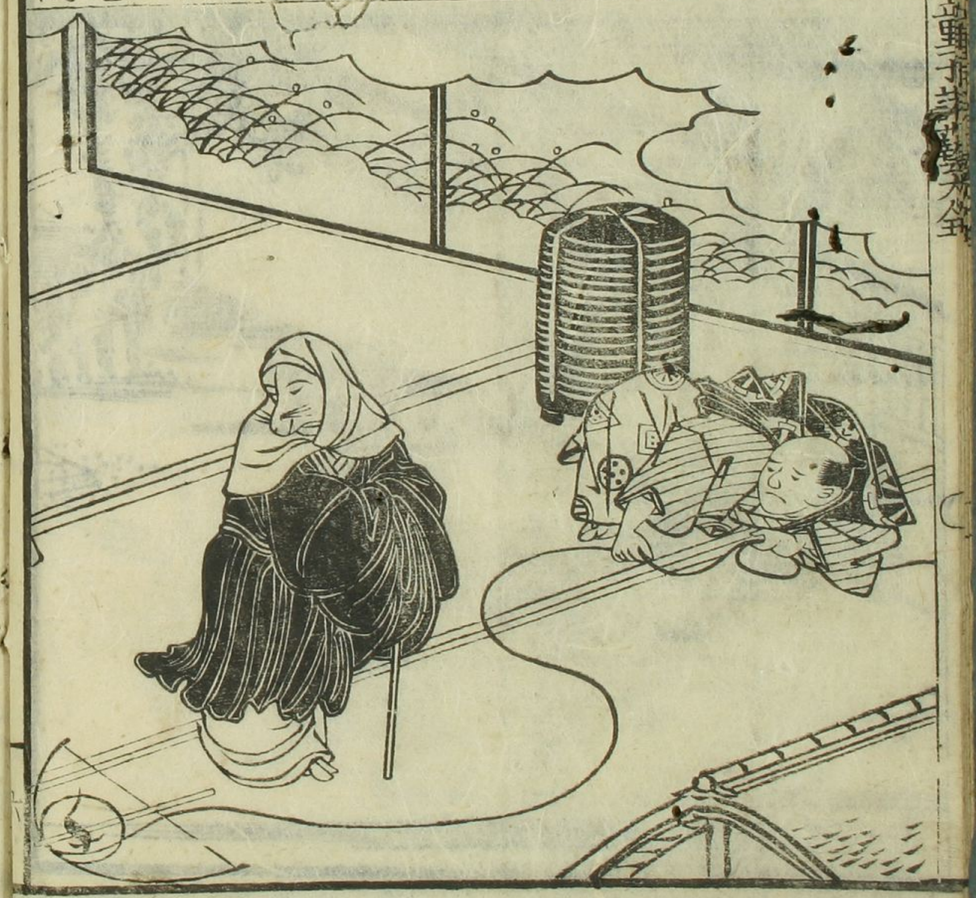
能とは申しうかるる官高
家分金をく早能の事に
めさるべつて能優を支そ
下のたつそはをおしめんが
なのあるの紙能ことば狂
言しく狂人のこ家乃ぶく
なるこかく名付こう謡流。
大蔵流の三流あり
風の能の事系良古座よこ
めくおてはのうきなひ
うけ七理こをしけこるも
みとも先ふ人の能こるの
まあ〻淡佛絵のころ毋を抑
絵もよ和でよきこの所

なり扶こそ其の活絵秋
人金歌作お風こ能り能を
まこ系人節と身こ世則この
古文の能分こもこるぬべ
春日能神こを名月乃ま
世河保の能とろ此風
我が時風多ろぐとてやき
沸とまうふ世こもろと風
系とこ人て二人と名乎も能
よこのしぶの附風ぶこ附風
こ両分こ云月神大神敬武鹿題
尊の補能の所こ清と変世て
まこの和朝義経こ大じ頻
朝義経こいこ及ぶと湯捕
よみとそこ金月神一のもとるこ

元を俗の紙にてけつきます
なれとなみべくなる俗の
俗にて世俗の節を好さるを
ゆく風の時風興行の節
字のやうにてみるくう

乳嚢

博盛ゝ大元系狂言ゝ於
て在紙揚名を記せり永徳
年中家列博南の庄ゝ林
寺と有諸所耕ゝ者の任
俗を宿義主ゝ行法宮の稿
前の神ゝ信ゝ毎ゝ法施を
なしや時社場ゝて三島の
狐ゝ抱ゝ敵ゝ表背を
山狐ゝ変る事ゝ元ゝ



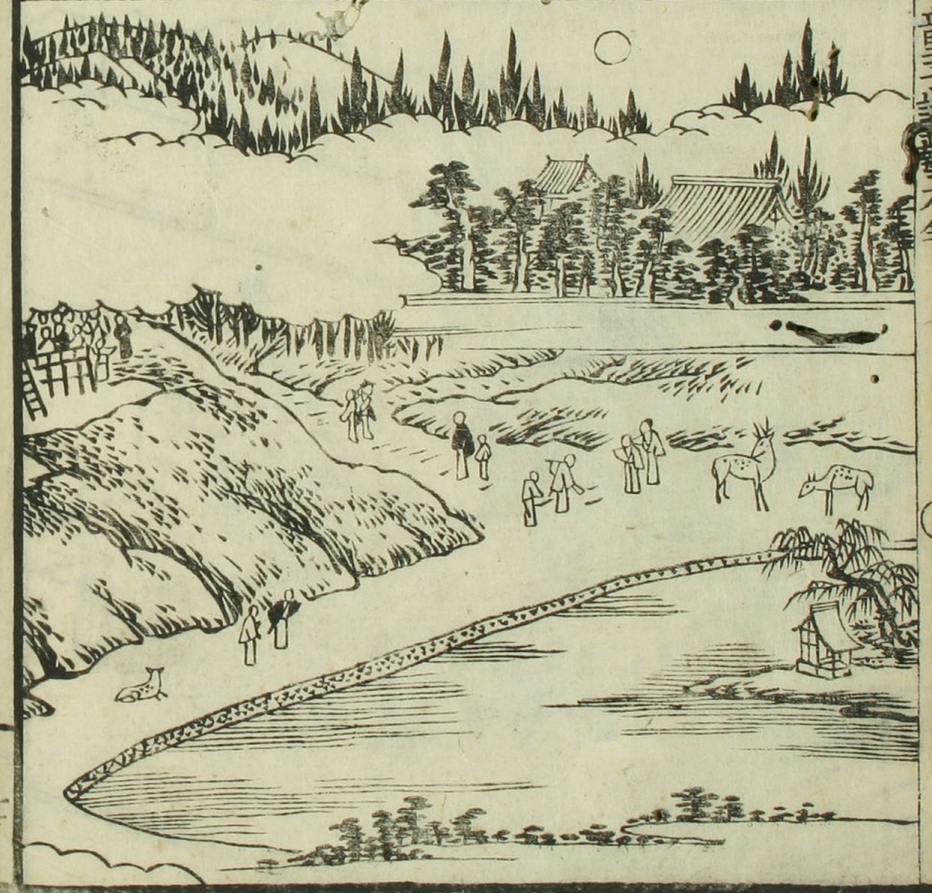
紙ゝ紙ゝ退ゝ紙ゝ
前の狐を去る山狐の子孫
ゝ内問ゝ信ゝ大元系
狂言ゝ狐の乳嚢と称ゝ
ゝ云彼狐ゝ光翁
ゝ大蔵氏ゝ狂言ゝ
ゝ其ゝ称ゝ狂
野狐の取ゝ
能ゝ表ゝ信ゝ
ゝ元ゝ大元豆
ゝ狂言ゝ
ゝ家の大事ゝ
ゝ其ゝ
ゝ称ゝ
ゝ持ゝ

脇師

進爰後て春爰る安
家七彩之爰なるの家あり

笛

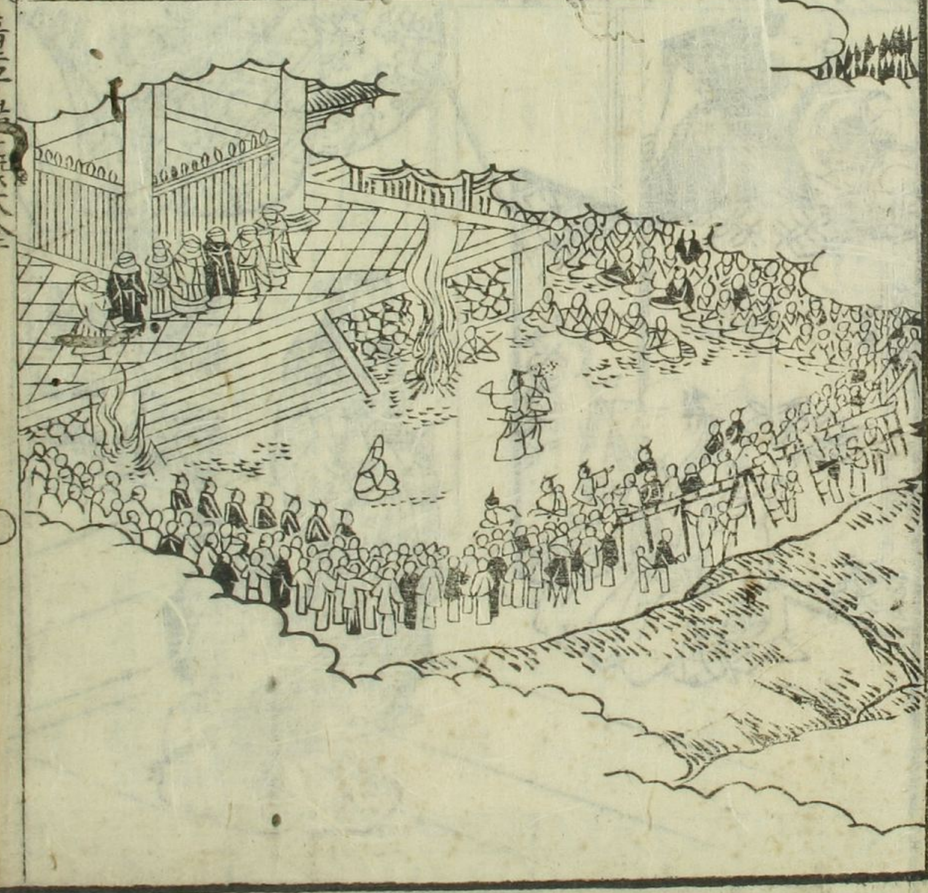
能笛ニ宗流あり所謂一曽流森田流[illegible]流春日流[illegible]流[illegible]等く中村[illegible]と云妙俗あり之一曽流の始祖なり森田氏元久年氏なり毛利元就の臣宗戸伯耆守笛小妙得て医師何某ニ伝ふ天正の比大蔵左ニ湯七蔵の医ニ[illegible]ひ世ニ唱元禄四年始祖之[illegible]を小笛ニ移し寛永の比森田宗



金元[illegible]て御紙[illegible]と小笛ニ紙[illegible]と上意者しよう[illegible]の[illegible]換て世俗小笛と称ど

小鼓

幸流彩九郎流大倉流を[illegible]幸元ニ列宗治を[illegible]永源の比幸ニ郎治郎忠[illegible]紙[illegible]ひ[illegible]ニ卒て[illegible]幸の始祖なり[illegible]宗治幸ニ大夫ニ郎治郎ニ紙屋の小[illegible]宗[illegible]て始[illegible]ひ[illegible]ニ[illegible]ひ[illegible]ニ[illegible]ひ[illegible]ニ故ニ書て[illegible]



巨鼓

太鼓流威流流三郎右馬流
採用し有所出集て元大鼓三重
子三幸に及び巨鼓の鼓
世に広く元に伝て栄の潤を
堂に揚げ元に其の名
何れも元に元にうんや下略

太鼓

左右流巻之流梅子高安
家は長今宗流くらう記
世宗流宗流元流の
祖之子与郎こはるの鼓
の如く世に○今春道寿
孫七郎元今春拵に門之子
名は得る也

萬歳小謡昇平樂

内外

武百五番

春之部

高砂	月	月	月	月	月	月	月	なるは
老松	養老	月	月	不老松	五葉松	雲林院	八橋	田植
月	月	月	月	西行桜	若松	鼓瀧口	二人静	桃海
さね	ひろせ	西王母	藤波	花月	白楽天	綱	老松	地蔵
桜行幸	田村	月	月	泰山府君	春日龍神	鞍馬天狗	熊野	月
さくら川	忠度	須磨	胡蝶	小督				

うねめ　日
夜さめ　夏之部
あやめ　源吉美
鳥帽子　蟬通
野〻宮　姥捨
雨月　雷電
六浦　如月
こがら　猶秋
花筵　逢坂
玉葛　砧

夏　小夜
雲雀山　加茂物狂
月後　素拝橋
班女　清経
日　
大江山　玉江橋
三年寺　日
七夕　七人猟
弁慶　菊慈童
源氏供養　定家
頂羽　霧
大祓

秋之部

やしま　月山
加茂物狂　ちしろ
清経　
日　
七夕
弁慶
菊慈童
定家
霧
大祓

葛城　鉢木
龍田　河竹屋松
るゆ　日
うれえ　日
玉の井　白髭
龍田　加茂
放生門　日
はの浦　東門
羽衣　日
現在龍　小鍛冶
放下僧　さぶ孫

なつは　竹雪
めかり　厳島
苔むし　ごせう
弓八幡　日
日　
白楽天　蟬通
青葉笛　竹生島
日　
日　
日　
布刈　日
布留　よ野
日　

雪山　
厳島
雑説之部
ごせう　日
日　志賀
日　
蟬通　日
竹生島　日
日　
浮舟　
松ちち　
うね女　
志賀山　
住吉詣

和國　源氏錄　歌　上宮太子　源吉文

藤亀　伏見　泉弟芳　之社流宜

退善之部

とやま　月　月　えかく　狩　狩　ゑせを　さねもり

ふるせ　ゐせ　戸　ヌ　匠　ゑ　野　狩　狩　大　會　舍　利

花　月　たゑま　言　之　部　猟　く　いとふね

金　れ　ちなん　老　松　養　老　ゆし　山　子　秋　楽

春部

ゑる　砂

不知たゝこのおのゝ乃まつもとゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

れひのゝみもとりくはやこれもさうげ乃

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

おちどうくなるまでいのちながらへてゐを

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

いのまでらいたのまつをもひさ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

めいもとくふく

同

江海ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

風ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一流に流れともに先
祖のことばをもちて流
ことを第一とするゆ
ゑなりたとへば定家を
うたひ式子内親王の
ことばをかりしゆ
ゑだとくうけくしく
うしひるがちなるべ
き女のむすめ養
子かどをうつてを
ゆるすていはたふ
中ゆをもんのむす
めをこのてうたふ
ゑ一足を法とする

おひのぎりこそめでさうけ花げふやわふ
ざてもこもれろやめぢよふとある民
そゆこうなるきみの見くらぞ宵ぐ見れ

同

うかやこのうらぶ梅ふけをあぎてかりろ
もにいでそをのうられわらぢれたるげや
こそくなるをとのれとどてこやとみれふ
ほそよりこ

なるふは

とつ
一條ふ一ぞう二節とつ
どもうるべこそ
ふをたけて
ふさんとれの
たぐるずず
あるこそ
あるふとたしぶむ
ゑ一ぞをれく
曲をもち曲をもて
て梅ふをもれとつ
こうり古人のれ人
なりとうくうたひ
ふ一梅ふ風合うる
ぞうひとうぞへ

いくらかなるうろぞもるれうりるれあまろ
ひつそのみのざうのぞうぶちまこやうや
こちろとくなるみよりをあぶぐんとせれのと
さぞちふやまでおまま梅くてら夜日ぐげれ

同

かうはぶはさくやこのふふるぐりふ今へ
ふるるぎふうかひきてふけども梅のう芽
えぞとるくうねみよとかやげふやたのふ
いれるうはのこにいくちまでゆくうかか

あためしこそげふろひろ

同

ぬるとゆへやきうくいかほうしぼ
みたくのせんちうだんぜいのちそこのも
をたてまつる

同

ちはのうえはなふ〜ゆ
ふわほうくいけ〜くもべんがうる。
まなれや宮代のなをあんせんでやてふ

老まい

まりが孫のいうほうをたてまつけしろ。お
きしはのみちまでもげふを清わりやこの
ふのあみぶるゆれたるえをもちをゆ
まくとうざうりたをりやをるとをば
ひあのぶぐれいぶやかとりんうえのくふが
ちをふいうん

養老

長生のいちふこそおひせねらしとをわる

一酒毒のせいは酒の
みぢうをかうたひを
溜ゝ
一けもつのとれは溜を
者〻敷を居〻
溜をそぐてうたふ
ぶ〻きの湯のとれを
敷を者〻溜を居
〻敷をそぐて
うたふ〻古人
老わるべからず
ことのこれわれ津
にたくことをと
うたひてもぶか

なるふ〻これもとふぶとこのぶよせの
たわ〻をまひ〻げのいとわのふとり
ぶておひをのぶとるふこそ〻ぶくと湯
もひふ〻ふるこ〻

同

実やふふのぶふ〻をるみよどとて
かぶふれを湯のとれまひ〻ぶ〻ぶ
発ふふ〻〻〻〻

不老松

一生れはれてあの毎
よわ〻ぶ病ふよりして
こゝろのいでぶるふ妙薬
桔梗 乾姜 一包
烏梅 甘艸 各
右粉にして懐中した
ふこゝは移さゆて
りちみぶ〻
○溜熱〻うたひて各
のたぶしていでぶるに
破笛丸
連翹 桔梗 日
川芎 砂仁 一包
訶子 日 河楽 二包

あ〻ふふのう〻れたぶ色のよもろそう。
こもゆふふけるわ〻そ十八公のよそ
わひみどりれげもひうまたれひれ
ひどこ松作のさうえ〻ぶ新代うやく

立春松

はるたやおのえれまりのうとく。
ぶうはゆふ城ぶんぜいの道ひろく。ふとと
たこもゆふふ〻ぶきの代のまう〻

蕎麦　大黄一両

甘草一両

右細末してたきごの白

うふ●こしかどに四

毎朝寝しかに一粒ゑ

ゆふくうてのち下し

○痩せて弱れいで

ぐるにハ河よ散ら

朽ち散

河子　杏仁

貝母　甘草各一両

右粉にしてたきの湯

うそのむべ〜

又梨子汁一椀のひも物

和上

朽ちむもこ

いのわ〜

うこぞそ

八　湯

ツヨ上

あまの小舟のほけぐと見えてゆ

ゆ〜ぐしらうぜまでものどるなる

やうろぞさそらん〜

田村

ツヨ上

ちろたくよもうんもうんりるそ

さろこと勇ぞと見ぐこせぐハを

ひとげかこのえぬるのそ

ふかこ井のづうぼそとゆるけ紙く

同

和上

ちろ花木のまふりる法のゆ

よわ〜しのぞそふらと見てち

やろ病ろうん

西沢橋

節譜の図

一直節　平声
丶下節　去声
ノ突節　上声
本節入　ツムル
ぬ一の字別入　ツムル
三丁章
丶捧節
丶振節
丶別振
丶廻　又折
丶消廻　又跳込

和中
わすれさるべけんや月かなる
夜のこのかたにあらしとしてをわと
もよろこびひとふれあさつゆ袖に
こもふなぐ免わるさん

ツヨ上ヶ　神まつるふるしたまのさしごと
ヤ　いのちの日ふるもれ君ゞ代をかをとゞ
ヤ　くやこのとしよりまつ月をとを
下　そそぐちせのを湯をよろぶよと。

又入廻
甲中廻
丶捷ぶ
乙輪廻
一政節
ら吞節
コ笹吞節
一振廻
別甲乙
八ル
メル
ハ持
一走
入
イ抱

ツヨ上ヶ　枝もはなせねみどりかな
ヤ　ゆうえうの花をやくむやワのみどり
ヤ　だんせいのけるのそらぷきみのこうげも
ゆくで桜のこれもかわもふたちようそ。
下　わひどうとそてなぐ免してもるも
さらゆくらぐらるゝ

和上ヶ　乃ちかしワのか
いとそもやこワきそのぐとの

イ　彩
ア　抵
ク　絵
ウ　淫
ム

ウリ　ハ七の習
ヤコ　ナリ又七ツ子リ
ヤ　ヨ子リ又五ツ子リも
ヤコ　ユリ

名月し篇

一章外とくだる分く
次オより道行之一章
一ヒとうよう近一章

ようふくはまんゆたまぶまいろべ
ワのふもをしやはひもせんわしふく
ゑれみうげをのゆたもうをうえもを
とうをるくうされいくたれつのふたまふよ

二人静

和上ウ
これ先とうさうふるとてもぶをきうぐ
たたこの里爲のゆたもうるつうふとべ
いまいくうあり為ほまにぷうるづと
いんだうりうやみうしのうひもうたて

ゑくゆたのやうふ

和上ヤ
ふる風のふくしもふどやさてぶ孫のと
めねをうたふうぐたたふ和を先ふうぐ
むもあそぶうられひうるぞれりうる。
りれくるきくひきく流るくたたもきよ
くすいのやうひろそら怒ガびたたく

鬱

和上ウ
あうへい待方れつ孫をううあ。まうは

白次第百石百石百
おどのを
次第　若宮　道行
一セイ　二ノ白　サシ
サシ詞　サシ琴　獨吉
琴詞　徒吉　下ノ
上ノ　拍合歌　地掛
謡　若　カル　セル
カタリ　文車　詩歌
初同　クリ　クセ
上掛　強吟　中入
同強　出端　和ノ
切口舞　待　祝
右の若同しく各謡

おちくのごとくあるをなとときよくあるの。
ふまばきてくぶるちのぞたもうかなり。
おちかりろはちすのあるあるあるあるはちすや

廣　秦

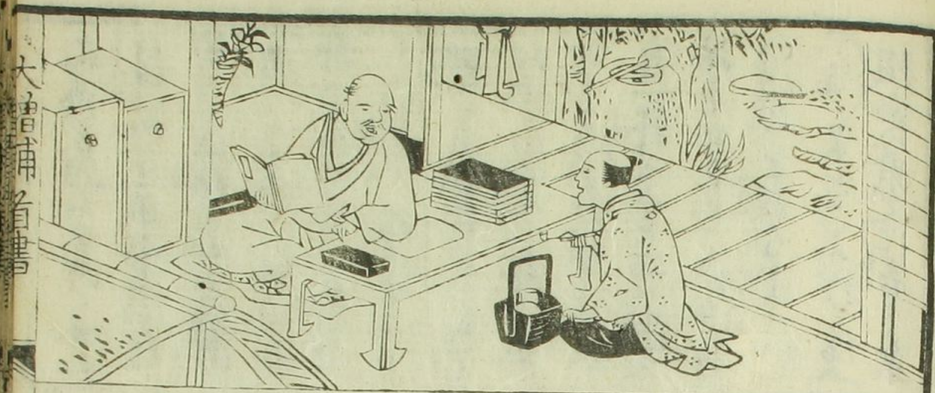
つるふひろはくさりはさるをくく
ふはくくるるくくるくくるくくるくく
をかくくふくくとめくるをたてたはる骨の
ふとくはかはくくく

柳子 識法 陳柏子
孫子 孫武 幽玄
嘉番 嘉傷 茶曲
一湘 湘夏 湘愛
右く 祝接濃 引多ふヤ
とぐく出せり 求く
見法ふ尼し

吟こ海

一強吟 経言の吟 八ほ
も和吟を 乗 次 統も 文
一番の縦組を 丸さ次 是
経言脇 濃の 賀多り 唯
を て見ねうたとぐし

ふのふねをひとこと世ことはて
けふる衣
まよやゐんぐうこのくみのくさらだる。
ゐとらをしくこのりとをたちさう
ぐ尼ふのそでうぐくふわうねとうと
のとりれ孫をつ。りれうとるもんのこと
ゆゆぐれたぐるう孫のこえく
とくらくてん
そのかそうるいちくるいのつかたぐて



かとよむたわしいわくありそうみの
くゐれまさごのくぐくつぺきといけ
りのいぢれもうとをよむるを
たかる
とをふひかてふろひとよみでをす
ををてさうぐれとをとくぐなるやわぢ
さゆとやたけむのひとりあるにわとの
まどうたのとあるうれまるあんうぶ
たいまり

一和吟うばらりの吟は中わらふ白ぼたのう成法てをを法度地でるうばら物老女物ちををく文まふしと斬く扱人ぞ

一釋そ〻無こ男りの和吟ありてる神しをおしをよをむこ流人をを拵るふをちぼ又法をふをちぼ白るいぼをを頼ふを

一をを寺をこう拵て流人現立の鬼又ぼ者こ集

光明有たこくぞか義

一セイヨクなかし後出端ヨクなわり考ぞ

一中吟こうの有尉物ふ多ー直うをたく下うをわふ流を

うーラリ中吟へ表裏ふか唱法者を律呂

俗名の青ふし男有多多の俗ふふわちどんで流ふるこ題

ようく師によりく男ぞ

和上

わまだるゆきの宿えをもだ成神

まるくくふざりたをりやを宿とる

梅のくふをれいぞやかこうん梅のくふをれ

とりまをん

地主

和上

をふのふをれのちをひもへをけをふく

よーちや。柳のいをれみぞれしこ後ぷいれ

こををとうぞ後こぞれこのゆりぞ多

同

和中

ざーんざをまれのおとをざんざ

柳

和中

をりをけ衣をを見れしぞりーをのこ

をるぞこよふちをのみるぞるざびを

うげをむみちをのをるぞるざびを

けーををふだををもくれのをるぞ

たむ

和中

をふををこうだのよをやひいづくれ

をーををく。のどけをうげをわうけの。

唐高世話ことば

一こうるを童子
一よるとるを好事男
一女と女人
一よるを好女人
一ちゑくをるを陰々ぬく
一むすめを わかつる
一よるむすめを よく女
一よるを井とこを好男子
一いろごとを想思
一うるひむすめを不好女
一わかうをなをとん
一ふそくをうんちん
一ろうとをいたち

和上
一元 天もとふるをつやかりろ妹そるをや
一ろ あくたをしろのくがべや

同

和上
一ゲ ゲやわんらくせいよりゆこれ妹ゆど
一ふ ふまげんしてゆもとらぐろのくらんぜおん
一ア あふぐしもゆろかるべーやくぐ
一ア くるてんぐ

和上
一ト てたりをとるをるをこそゆくもま
一ア ようしぐくごうげふるをわていざ

和中
一元 くぐるとうぐえん
一ア ゆや

和中
一元 まるふのげるかさよるべのだたのわ
一ア そのをしたるをちぐ妹るざり

同

和上
一ト たちいでてくる孫のまくるやわしえをか
一ウ ざくらのざをんげやもちをかく

泰山府君

和上
一ト わらをひしえぐをくるの純男をるん。

一よいるを　好
一るひるを　不好
一年　をぜんと
一廻　をたん
一をを　をちんか
一うし　をつう
一たい　をえぷん
一ぎくを　をぷきい
一ふうを　をうう
一さけを　をちう
一りち　をべつう
一たどこ　をそんつわ
一りのまんを　をしそ
一まかひを　をひよそ

月をとともは孫だやのぷをいのこれこ
これるのをきのちまこ

春日神社

みのけぐもやるざうこのみをこと
でうたぐのこをこそのどけうるる

さうこうこ

さうかこせぐ鳥こうこをげれれだ。
ネをこうぐ毛でこのうれ毛るけうこ
くみのこうげふけりうこ川風ぐく

篇冠構字盡

仁	心	口	忠	戈	巾	牙	矛	乏
土	木	禾	小	月	刂	斗	刀	角
牙	又	田	女	衣	虫	目	貝	草

そをのうこうきむさうこうみこ長ちか
もをぐて孫だうよみうら風ふこ山ふく
らをうう川ふうる川

わうぐ

さうふひうをてかへうこのみぐまんの
たる孫まいてぷうしぐこうりやさうこぐ
のゆこをとうこ次げーれうふく

さ孫うさ

帝	牛	胃	歯	足	手	子	走	支	赤
内	宮	宮	宮	牛	牛	牛	辶	牛	土

ツヨ上
こゝろのわかのことだうそこゝろの
ぶをわらはちたる孫をうるはしの
らくらめんみちをうばわどもこぞれも
をりぞもるべなば

ケ
こゝろ

和上
さやまのうち孫のほゝづつえてら
くげを日のやのゝうれいのいろ
ぞうしさけうてくしこのぶふ
わぐたまくやゝ

和上
おてうのまひくいろくれてうの孫ふか
ざる金銀ひとをふ灰ひ灰のうら孫の
さねをうけまもふ

型
うら孫わ
さてうちるうらうそまひまも灰を
ゝとゞ母女のゞけ灰うけわうゞぜんの
ぎゝうどのてうふたゝ灰やゝ

同

宀	疋	四	尸	口	襾	丶	冂	工
宀	疋	四	尸	口	襾	丿

粉糊込畑
後祝遊戯
駿地紙抹

（大坪初雪漢和かるた）
今さこの字を自制せむ今さこも古書の一部
おぐら紙は懸て作るも
悔なし　又いみ分
用ひ来るを俗字世話
字といふ　むもなかも
ものぐりの粗儒愚才
のたぐひなるべし

どうなぐ　ぐ　ぐ　

本朝書家大意

一それ神代上代の書風清唐の風を汲み漢魏の遺を紀書風を要とす故に出来し集古法帖とて中納言の古筆書の臙脂を紙にせりた鈔の墨帖を紀家にて流れ来る紀家の筆の跡として名を紀流書と号し光明皇后の筆を紀書と吉備公の勝れ

魚養たかひろ紀流書

たり紀を腐儒の徒唐様を雅とし和様を俗様と云い我親を兼勝ふ不孝にして他乃親不孝の不仕ゆる愚人のごとく書は用をなすの器なるを虚妄の具とし万の在り書妖安ふる紀よりもあべし

一上代様　紀家之中興祖　行成卿之祖

一世尊寺様

一定家様　永徳黄門の流

一御家様　青蓮院宮流

更科

和上

さらしなちかげの月の面影をとあてびとの人をたづねわびぬれば

元

かくるるまりひのこころぞいとをこがるる

ところの月の清ふひとくれのゆめ

ちぐさの人のまよひかな

あしやめ

ツヨシ

きみがよふひさしきそひしをもかの

ふとりのあゆ宿ごとの新だふいとび

和上

ゆ

ツヨシ

元

ツヨシ

元

ツヨシ

元

義道伯西周相模守
[illegible]親王
勝[illegible]守忠應親王
[illegible]親王
[illegible]朝親王
[illegible]純親王[illegible]代の
法帖書なり
一近衛流　近衛関白信尋
又信尋公信輔公とも
中ごろ之藤院殿と
中興を組しと
一光悦流　本阿弥光悦を
組しと
一[illegible]流　八幡山[illegible]坊
[illegible]法[illegible]流[illegible]

和上

みかづきのそらひとばんは。
いにしへのかぐやのつきけ。梅い
ちとせのいとまもなくそ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

松花堂と号した画師の
一塘流　牡丹花肖柏の
ちの流
一志津流　高野の僧侶
志津ヶ岳の賤の苧環の
苧環田楽の口伝なり
田楽は高野の能者なり
千利通村流二条流
勅旨流宗祇流山崎流
紹鷗流大松流千貫流
玉巡寺沢玲休金森
山田長雄授山崎
戸田相田芳子等伝神
之伝　お後かとかの

初学用文章

年始と半紙
新まぜ之術吉慶
平丁有深浸古歴
術家間授古授伝
伝壮健義古城の
国宝度年年深る
和歌年義加
仕為見紙伝紙
ぬしは年年和紙永日
う時心忘流

わとのかと
ちそのこ田のことをぎてこれどふきと
ぐこと忘たてくゝ絵とをぎるよのなるの
おしへをるゆとふことのをとゆかと

雷　電

ふげのまどふ月をまま極ぐるを
あのあなひしひなのうちも明るふ
あうごを
げんつう　あげるかのとるれ

うちのうぐひをまさあれのせとの
ぐんのこ忘いけまちのれのれらね
ちんだと
あれをるあつれとおれのをとをゆ
とぐれまるとれたをふにの麻をさ
ゆとるとと履れさひれまるとて
梅やの月をなるめん
はしみ
さらでも神をうるれをろさんの

同廿五年

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

忍恋

八朝進物有感

八朝ゝ赤ゝ色ゝは日ゝを
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あ

菓酒を奨ふ事

延年長寿の吉例
世々伝々保命
酒双樽菊花一桶
進ぜ申し上

九月九日

日礼状

如教諭重九の
吉祥に菊を
詠じ
詠じ
詠じ

為紫苑之栞歟
思れ寒猶残成下
陣屋はまく玉ゑま
ぬ何爾宮委後
門事くに出れ第く
和寒玉出れ下の
はく

十二月

紫蕣之書状

紫蕣之出侯中述
弱く侯様一童数子

翁　月

こうばらあけゆく空のそれ
らあけぬるようてはくだやねん釜の
おときぐれよふわくちくぎくのなるを
うさしてなもふふとせ紫る
らんくを

和中

とれるかさ
とれるかぐはよちくだくのされみぐを
なる野ふるこてあらねぐわなり

翁　蕣童

長尾中納言殿
蕣花
蕣花之芳ハ
摘ハ不安全之旨
京ハ寒ハ
主人家一桶段進
上ハ士屋中ハ
蕣

ちを縮侯子様方ハ被
麿ハ日子様ハ徒無
侯国ハ様蕣ハ
出ハ
和寒ハ
蕣

ぜんのうまわ
くまうふられ
若くとい
長遠ハ天下を世さわたまや

和上

こがう
あるやうもるこひやうれ
るかわしれもうれ世のさがはぞ
ひとふるこのあうこあもべしや

柿秋

以後中伸に付き
申さに恐惶

日延書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月

[illegible]

和上

長月のとの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

定家

和上

ふるもまがれるもそれとふるぶるまのを
まもりなしのぼるもれやどりもかも
むぐるよのあとごたゆ色なりもく

さかぐること

当上

ほ西をまぐしもとめるもとてよもふろ
そもそもみぢまもふしもれみ
どりもそのあるなめぐりあか
みゆるのまもやえんく

元暦元年秋

今日日摂家

伊豆国に流罪

元服する国家

さかりの幼稚者一

籠を伊豆地一下

遣上仕法文る

長者赤者あり

遣身領牧院

ヲ上ル

日五十年

当上

をぐよみうげもとみぢどのつかた
のうもとてちうひもたくぬ落まろ。
いぐくうれたもけうく

紅葉将

聖

ばみやたふがるもふ風のうけたるもがこ
乳
おがもやぬもちぐをぢてだ
なうたえんとこのりしふたちうて
よものこぐ居て暫く休こまや

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日五事

紙類物源始

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文延宝の比長崎より
大坂ゆきて京にゆかひ
ひろまれりと今諸国か
ゆきて中絶せり又日本
にもやはり西瓜と出やう味を
佳なりと摂州大坂の西
市岡新田ゆきの
天下の冠なり
漢土のそハ元の世祖西
征乃元大宛より種
ゆきて西瓜とふ
蜜瓜
京大和のそハ東蒲塞
と云大坂のそハ南京と

和上
それとあれのこりげとしれとゆるの新
うりてゆるの新のこまくつ美
ようちとやしとりんく

和中
閑
さうとんでいゆるでみうれとり湯士乃
たくひとれくあなりよくよちそ
つとそ海へや
なにと

ツヨ中
ひとつ紙のみひざめのかうとを
京ハ
ようやかろくいやゆにてくらべたられ
ふ状万歳のちちとのむをたてまれる

和上
作雪
いのをごさんたわ絵どもやうきれのの
れとさよおひのちてごとうやせん
いてくちをたまれ笠のおとけち
ん

和上
哀松京
ゆかやさかなださうねてど虫もほ
ヤヲハ

と云はつて蜜瓜と
云はつて南瓜と云
ちいさをを唐瓜と云
元和年中ゴロウ
天和貞享の頃より植
玉蜀黍
天正のそこめ渡る糸
大坂へ入るんどび
と云はつて唐瓜と云
番椒
慶長年中たごと同
もつると云漢土も明
のもとなくてめてゐる
と云祭かゝ糸綿月ハ

ふるんぞ畑りにしもくゆたか
なゞ色を何よりたくまし
雪　乙
けらうでけらうでそのまゝにうる
そでのゆたこびうゝ稼ゆたこをちよ
にふれどにくらびまこをちよにたくらん
秋田　丙
あくしやいろくのそらぢか
ゝ糸のうとゝ降つゝどりみぢも

見くこと
藕　豆　カキマメ
原元禅師初めて
とりかまつ月二月
たゝ糸と植とあれど去
反秋の月熟しても生也
甘藷
元禄のもと流球より
さかまつとるかまよ
云南方の人々多くあ
五穀と食せば耳藷を
食とする人なりと有
強の毒なりのりかる
小児に毒なく便秘乃

ゝ不つとゝ糸てゝ糸てゝ糸て

おちくしむ須日学上
一統これを出ず
定永元後数百年
年号を改し今や
本の流ひろ出
種々の物編筆硯
紙墨食物飲酒乃
長書精玉石物
雑貨の類本朝
産せざるものなし
分る所ふるい瑞石
張ひいどろ砂糖
おるべしまさしくあん
武百年餘ひで死ろ

かどもおく。そこ所をどみどり
なるめりのそれをまひつぎろを
いたしさまぐふぎこの見ぐこをいのるな
なり者のめぐこをいのるなり

歳暮

たのこれぐこのうあどいひてたこぐ
やよれうざのふくもみちをぐ
にうるぐもして屋者のおこも
れとせぬぐこのれをもおさをうく

雑説

おろうのおんもくふぎるかどの
ふりとていくみをかんてうふもぐ
うんこれをあまうんと

同

はされのうぐらかぎれよのだとへなるる
とれとぎの中をかたうさごのまれ
だいのれこしをあひあひの杖でめぐさ

芦刈

衣服門

びろうど

正保年中京西陣より織はじむ漸百文ナ
年紙よりする

こき紅　中紅

紫應の比京長者町
吉又屋吉三郎と云
者藤枝とりて初
て年もふひとし死
いろを染ぶ七ゆ
うりことよ

よ紅染

宝永のころ中村よ紅
染

このふうこうまでのうれちく
なるゆへよりぶわ紅とからのこ
とのてらしぶたちぶ先なるべし

ごかう

型

うけらもやにろこぶ洗げ絞あれば
とくあるやありがこあるぶこれ
はげぞめぶこうり居

やうらう

とい世之居りの初る
ひ染紺と者ろう

紺染

備ぶの吉寺ぶこのこ
うて初るれと者羽
せらる

勝ぶめ

定文の比京後者ぶよ
紺屋新兵衛初染也
大に利をうて家ぶと
なりぬ

憲房染

明暦方法の比京堀
西洞院の吉岡憲房と

ちんの七けんぶたのこぶ
ぶそあるぶたのこぶのこ
めやくめみくもうど君れなるよさげん

同

そでひちてむもぶでの形ぶこ
おれげふをもうこだなるこうふれのも
ぶこもわるみぶとるこそうにうりる

くれと

やまとうもるうこれのいとうみを。

いま者けづめてそめ
出し者岡深くさいし
人数郷の郡よりて者
岡の一流を出せり
紅板ノ
明和弐年ふ初ら深出
堂松ぞめ
宝暦のくしゐ西湖院
仏光ち堂深原ら云清
初ら深いさせり
一孫深
友源深のうれを変
粉を翻よりて粉也
うそ仕立てう明和元

いま者けづめてそめ
出し者岡深くさいし
人数郷の郡よりて者
岡の一流を出せり
紅板ノ
明和弐年ふ初ら深出
堂松ぞめ
宝暦のくしゐ西湖院
仏光ち堂深原ら云清
初ら深いさせり
一孫深
友源深のうれを変
粉を翻よりて粉也
うそ仕立てう明和元

同

わやのこけ紅ろ〻ろもぐをくも
きみがそでふ紅たぞ一どびくいとの
くるみよぞめで紅

弓八幡

まれたぞもつらふるとのこ孫。

ふをしねぬ清代いひさろこの風ろ〻ら。
れとこやまげふもこ孫ろげふさ丸。
きみぞんせいといのぶかるぷ〻ふゆ
うをぷんこぶなりハこ〻〻

同

きみをう孫。ちんろ〻ぶかのくみぐを。
のこりふくなびくこさりく紅ぞも
ろもわ〻ふなる沖ちんさくぞめで紅
ちんたくぞめでさろける

[illegible]

敷織

大坂新[illegible]所[illegible]と云相撲関[illegible]の素初る
宝政年中水戸藩出

永信

京辻西洞院の西[illegible]屋
利[illegible]寛永年中初
藩出し菅大臣像と云
菅公像誕の地なるゆへ
名を付し[illegible]
四[illegible]と称と
木綿しゆの[illegible]元
天竺のサトウを似せり

同

[illegible]

志賀

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一ゝそばうんろのひろ音ハ
まそぴ海路の日和あり
一けんやもちい　稽興亜
一ちんゝ　ハ　ちあゝ
一ひしぇい　ハ　一月
一けり稼　ハ　ちりよ
一おごるもち　ハ　うぐるもち
一あごと　ハ　あだと
一ゆもぐ　ハ　そゝぐ
一ぜうるごろ　ハ　うゝるこ
一ゆぜ　ハ　ゆゝこ
一うげもの　ハ　すげりの
一いぜ　ハ　ゆゝぜ
一ゆゝぜ　ハ　ゆんゝん

ちゝひけ

ハ上　ハとへてゝろもちをゝ稼ぎれれ
元　なれ身ぎゝもやをたのゝむこのれ
元　いゝゝゝあをゝゝありゝゝゝゝ
元　ぼうまゝあゝ

白楽天

元　そのうゝうるいけんぶたぐて
元　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　うをよむたわゝゝゝゝゝゝゝ
元　のゝゝゝおまゝごの粒くふいをゝいける
元　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　ものいぜをもゝをゝをよむなり

あゝとゝを

和上　ゝれぐれかれたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　じまり今ぎんなあ海稼ゝなゝう
元　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　れをかめさゝんるふもはゝの元海書
元　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　ぐゝろをうけたまりてゝゝゝゝゝ
元　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　うゝのちをゝゝゝみゝよゝゝびゝゝの匹
元　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　若ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同

和上　元　元　ゝのゝてうなんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元　

百官名盡

摂政関白　大政大臣
左大臣　右大臣
内大臣　大納言
中納言　小納言
宰相（参議）　大舎人
弾正　中務
式部　民部
治部　大蔵
刑部　玄部
宮内　左清門
右清門　右玄清
秘書

らうにいだしたうぶ　松ぞ
たもうもんのまことをあらはさるべき

右近

梅がえのあらえもえて
私もこぞうれ
くれなゐのくれがまめ野の。
ふぢくらぞ三

を

みたしのこゑもぞ
たぐもりうつろふ

大将　中将
小将　侍従
右監　監物
蔵人　主殿
弁官　内記
外記　主工
主馬　左
大炊　宋女
頼母　門舎人
久米　玄蕃
主殿　典薬
掃部　左馬
右馬　玄庫
隼人　織部

ゆくかぎりをすぐそよ
いまひとくさとりもつ
らゆ　ひなのきぎのかとぐ
ゐ　ぐもりとやうとぐ

同

とくれやのくもぐるくもぐ
ぬ　あらねのこがらのこ
ぬ　ぬとせねぞたもけなる

春日神

正親　内膳
造酒　主水
大膳　右京
左京　修理
図書　内蔵
内匠　大学
主計　典厩
靱負　茅刀
滝殿　金吾
縫殿　雅楽
伊織　市正
税　曹

百官名目終

みやゝこのちゝはもさぞかるよどころの。
うゝれよりれとあらけくもとめる水や
のみうげまでちうふまゝ居ねごころ。
こゝろさのりれまいりぜとぞどもゝ
さねげゝ祭りかゝ

竹生島

ちどころれかたどくにたらふけく
なゝむもべもぞのゝこそかぞのさらし
ちゝのらざゝまのゝ入はのちかよど

ひゝざちゝよりたてとそろんゝ

同

よゝく者ゝうげちゝんでうをまゝのゝる
けゝしたゝりゝ月らいゝをうふゝうんでなゝさ
ぎもゝをゝぼゝるゝ物りゝれ語のけゝきや

殺生河

このみよゝふてゝ月ゝの八幡ゝみゝかゝ
ゝとゝひゝさゝれゝゝわゝちゝれゝをゝる風て
枝をゝゝねまゝの風ゝちよのゝゝゝ名のゝ

東百官

相馬百官

右門　右門
右中　右中
右肉　右肉
中記　浪江
数る　清守
中　浦
免毛　波門
厚る　丹下
加治る　毛る
求る　久米
類母　岩尾
右平　右平

いやまゝ　ふぐきまゝるゝ　ゝろるく

同

ふゝみたゝのうゑどきぞ　ぞふひる
ぬゝるゝざゝ　絲に海のなゝもちゝゝかなり

同

夜ゝもいゝゝゝゝみるびて　月ゝげらゝの
いゝゝゝゝ

古仏　梅丁
茂る　茂る
森　森
孫刑部　孫刑部
将殿　将殿
清　清
氏　氏
番　番
尾　尾
典　典
武　武
極　極
牧　牧
典　典
女　女
老　老
炊　炊
家　家
度　度
求　求
官　官
送　送
伝　伝
冨　冨
肥　肥
軍　軍
記　記
司　司
書　書
諸　諸
紀　紀
男　男
吏　吏
肩　肩
今　今
申　申
桑　桑

ーーー

一義多　森間多　志津ア　紙屯路　繰し助　織居　愛くし勅　小源左　左源左　たし　面　百　恰　登　縛　下

東百官名を紙

名以字ばくし

木性　檀　平　文

八　会　伴　門　本

ひのうらやうらのうらもたどる手蔵

たうらの市ふいでふよく

同

神ときみとへゆえわひのまれわうの

らうるる。あれひうらとぞわでうえ

わろち

うふうのうらさでうらたれや八重の

ほるうあてやあれをるうとれたのみと

ひうりどの源うれたうでえなりべ

武　矢　我　源　万

百　明　色　房　那

馬　芳　梅　只　卯

火　性　源　久　岩

壱　定　勅　虎　曲

金　芝　元　恵　菓

磯　吉　九　天　加

我　我　慶　近　数

土　性　傳　長　忠

六　林　義　竹　當

法　仏　仲　重　貞

ねや　矢

まれいとうれれのうるぞらしうるる井と

なれ釣ふうるぶふたうとふ釣れとふ釣ふ

同

いぶしやたるのわけぶのたぞひかみも

まれりぞもものどうれる庸のわりさ伝

大徳寺

たうをうるれうれれ門ちふ市を

うしたぞひ。そうまちくるのどくふて

丑 仁治を多
理 利猪伊子
金 性宇幸好
加 要兵運雲
為 恒猫雨寅
安 又乙由乃
友 京右矢和
水 性紙次七
庄 三小勝彩
清 義紙京表
政 正男才辰

たのしむてうぐ杖びてうぐ

和布刈

ひらけしかこよのごくこてをるぼ
かうをさんごろいやーのごのげん
あーるるぞありがこた

同

まったふりたさてうういをろくぢふ色て
このふれがぢとのうのいるごてもるさ
かいざうのみたーもてろのごくるぼ

和布刈

こころのもぶしけ風も春さまりもと
ちびうふ。あんぜんとかたくうや

現在福

ほゆさうかるるみよーそやたこもさうる
こーありて。若ーたまいも色くれ風を
ほさるるありがこやくく

こうぢ

たぐその色これさみの。色ごとふよーぼ

書初の詩

長生殿裏春秋富
不老門前日月遅

九月九日

九月九日菊花開
万歲千秋樂未央

池凍東風波解
窓梅北面雪封

今日不知誰計今
春風春水一時来

みちのくのあさかのぬまのかつみぐさかつみるまでにたれかこのもん

いくよろづよのみちぶらん

横山

よしやくいそぐ唯酒のみぞ花ぞ

志貴山

これかうざんは春さわたくあまのさうかこたちまちにいまのよまでもうぐ

さくらぎやまちを動ぐるをぐさこそ春さ

もるるふのたわしかなを

かうぞう

このふしのたけのよろさ

柳垂乳力條之動
池有波文水盡開

やどしたにさかりひとをこそくやんとやいえんいう時ぞ知るあさたちそさのみをとりをこそとあるもしかりそ立をうたこころそ中ぞ

独ひとて法ひ水流れをとるる立ちの風とくらえ

春ぞいそりぞ中みのあるを歳てけさいうん

七夕詩歌

憶昨夜長乞巧
竹竿頭上頻糸交

二星適逢未叙
別緒依々之恨

五夜初明頻聲
涼風颯々之声

露殿明珠空高
雲是織錦未成

和上
いとんやふく梅のたうだちあと花とのく
梅花をもやらぐることのくやよも
はたはやぶかたのとこや

郭郭

ツヨ中
はいしやもふこしまくふ
うあをきけんじやうのたのしもかく
やとおりのけしさうか

同

ツヨ中
長生殿のうちふかもあんぎうどこぐ
めたりふ老門のまえよへぎつげ
とゆこそろをまるぐもこり

同

ツヨ上
とびこりどうありのけのよるひる
ぐここたのしこれ業花もろうふ
もげかこのうへやあるぐさ

但右清

風姿既衰夜雪深
露及明月波未禁
去衣曳浪寒波濕
引燭浸流月影消
洞庭微波雖且遠
白玉盤中月影遥

ひとせとせ中に絶て逢まく
かりれ衾や思ひたえぬせね
宮ふあ乃ゐ逢じ七夕の
こゝろ八まさ乃ふ待一月日も
遠ばるもあ乃そや星の宮ね乃
あれる音の天乃羽衣

和上

月のかけろこのちゝひさかたの
どうぢんぺけちゐんのたそがれ
ぢゆうどうろうまんのてしもた
まで國とみたくをあらもむみこゝろを
たまとはあんがざるだんこく

和上

そぐうちおるもれ抑とゐ
をりんてばいくをもたくまりたんぺ
らんぶ乃ゐ乃ぶりうてごゝろをのぶ

天津星あ乃ら乃る河おこ八
ゐふやうれ乃ぬ歌ふりるん
定や逢ぬ乃ち一夜ゐ乃ち
ゐ乃ぬ乃やうみ星合の乃ふ
あわ乃ぬ乃るおもあるを
たのあ乃ぬや秋と毎ちん
よそやうゐ乃ゐ逢七夕の
ふ乃ぬ乃る年のうゐ乃れ
ひこぼしのこよひあ乃せひふみ
よとれくうるおうとを乃ん
こよひあ乃ぬ乃のあせの中ゐ乃る
あ乃の河ゐ乃月かとゐ乃ん
そうふとい乃ゐ乃ぬ逢ぬの
こゐろゆく夜の乃ゐ乃のこゐ

るこ楚まん稀んのよろひなるべし

猿頭通寺

和上

御子孫もそんじゐ乃ごゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ乃も
おぐいさのまれちよりけてはるこび
のみさをぐやをもゐん

ツヨ上

すまげんど

その後うちほど紫をたくし宵大臣。
とゐあのまれ乃大政大臣数ごの乃ゐ乃祭
ふ乃ゐ上天皇ゐくたのゐみをゐ乃ゐ乃ゐ乃ひ

書学初心学階

一それ書は用とする事勢の眞なるべし続ざまは淪かゝ徒ども書のわすれたるをたゞかなてそこそぐさるゝのかまびまじよむだゝ肯ようゝ云徒くるゝ続ぶれどうけ淡書ぶれどようえびとやすび半るを半一と迷一又白はまるかど作きるりのなり肯ようえいよ続ぶどゝいえり

くかきこゝちやかな

鱗形

ここゝ一渡のゆくこのいたゝひ月胸ふあうこれいちんゆよの月ゝにおくまもいうでゆそきざるわくはもいうでたそしざる

上京さま

おんでんのこまやかてごさん色いあんちうじごたんじまるむまやどゝこゝ元元上京さまの御事

源さま

父のらうゝ名をうえて源さまのちんとわゝらまゝ東海道の孫人とまもらんとちうひたまえて

ちるう先

いけのみぎれるかわらふさんもよそゝうゝぐさこの先くこそ肯ゝ紅くたまもりの世ふあひひみのぷゝ計里を

伏見

一青ようりいえるるまわり
きそ字をなろんようあ亜ふ
ふ字をかぐーしといえり
足生一本法自由に達去
るまり且漢字も達ん
とるべ一
一ゆ初の金沢家流と号
る一漢教ハ何かとふ
よく書用とるべ
をてわそびをのとり
りは物頭ふとの用ふ
五だりまて戦義法
の道しる色紙たん
ざくもまるわさび

和上
一一一

五月　紹夏　麦秋　梅月　盛夏　朱夏　景天　仲夏　皐月

六月　極暑　九夏　朱明　晩夏　炎天　水胥

七月　夷則　初秋　素秋　涼月　肇秋　早秋　白蔵　文月

八月　南呂　仲秋　仲高　素律　金律　金秋　白節　葉月

九月　無射　季秋　暮秋　晩秋　窮秋

和上　行住坐臥　ぶつとんとぶらうどだたれしそこそまことふかだうかうれ

博多物狂

一念ふつのちうしふてもどれ　和上

道ふいたりかだしやこのおくらくろ。

みぎうちを身ふうけてとくだのを

まさよえんとなりうかをさうろうみぎ

そん孫ひとうるへたるへや

芸預寺

まとたへなるひ押ゑぞろ

ところぶたりをもまひ

をもむろうたまぞありぶた

芭蕉

ふるとばやみどりぶとうろうしるわと

ちることもたぐそのまれいろのさう

和上

九商　菊月　長月

十月　應鐘　初冬
玄英　上冬　玄月
拗冬　陽月　無月

十一月　黄鐘　仲冬
子月　暢月　陽復
支冬　陰天　霜月

十二月　大呂　季冬
窮冬　臘月　惜月
陰冬　冬冬　極月

朔日から十日まを　上旬
十一日から廿日まを　中旬、中院、
廿一日から晦日まを　下旬、下院

そくも。ぢゆうぶんのぞくどどにゆ
ぶんのうくどなるべし

さ稼りり

和上　法のふとちるもちろねもてろひく
ちゝひのあみをるだやちるひとも。
ちろねんをもりきだやのむふゆく
つゝ、ゆ稼りうぶもゆを。みちとうや
のつゝれ、ゆ稼りうぶもゆを。みちとうや
く
よろかうし

和上　ゝとはのてしれり稼のこゝろ。ゝこと庸くふ

潮の滿干月表

朔日 十六日	約六ッ半	盈九ッ半
二日 十七日	月六ッ八分	月九ッ八分
三日 十八日	月六ッ五分	月八ッ五分
四日 十九日	月六ッ六分	月八ッ六分
五日 廿日	月七ッ	月七ッ
六日 廿一日	月七ッ半	月七ッ半
七日 廿二日	盈七ッ八分	晩七ッ八分
八日 廿三日	月六ッ五分	月六ッ五分
九日 廿四日	月六ッ六分	月六ッ六分
十日 廿五日	月八ッ	月八ッ
十一日 廿六日	月八ッ半	夜八ッ半
十二日 廿七日	月八ッ八分	月八ッ八分

ひぐきおておまを稼ちろひみちをの。
ゝてをうみやまも皆成仏の姿

九世戸

ツヨ上　だいもぐりんをを勅法のみちげわら
ヤヨトト　さふてぐるぱちのともびろをり
なくてらぢちろひたのをゝやく

身延

和上　正直捨方便垂上の道ふいてるだし。
ヤヨ　げふわりぐつやけ紙ふおふことかた

十三日 廿八日	月七ツ 廿六分	月廿ツ 廿六分	
十四日 廿九日	晩七ツ 廿六分	月廿ツ 廿六分	
十五日 卅日	月六ツ	月九ツ	

不成就日辛

正月 七月	三日 十一日 十九日 廿七日		
二月 八月	二日 十日 十八日 廿六日		
三月 九月	一日 九日 十七日 廿五日		
四月 十月	四日 十二日 廿日 廿八日		
五月 十一月	五日 十三日 廿一日 廿九日		
六月 十二月	六日 十四日 廿二日 卅日		

うどんげのぐぶまちろぐろ
のいまのさろんや

高野物ろひ

和ヒ

ひらひらくらうのらんつうもぐむ
しぐらん稼んのようもかひこれと
てもまこぶまうぢうれかるきう俳
ろろんぐくのさうをおしなまい

大會

ハーぜみやまをうのとろ。仏堅乃

周易考

み稼よろきちんかよのろかちまぐろ。
とろとふ　らんぐうを稼んぐもぐ風ぐ
らくとぐ　ゆるぐ抜ぐ　ぐぐ
ゆうぐ　ぐ

舎利

げふろ　ぐ
押ときた　ぐ
ろうぐ　ぐ

元月

九九の量

二二ノ四	二三ノ六	九九八十一
二四ノ八	二五ノ十	八八六十四
二六十二	二七十四	七七四十九
二八十六	二九十八	七九六十三
三三九	三四十二	八八六十四
三五十五	三六十八	七七四十九
三七九一	三八九四	七九六十三
三九九七	四四十六	八八六十四
四五二十	四六九四	八九七十二
四七二十八	四八九二	
四九三十六	五五九五	
五六三十	五七三十五	
五八四十	五九四十五	
六六三十六	六七四十二	
六八四十八	六九五十四	
七七四十九	七八五十六	
七九六十三	八八六十四	
八九七十二	九九八十一	

ツヨ上

祝ふのあふぎのもとにかくれみどりをぼさてこ
あらねたひまたみちるたかふくふ
咲そうさそこそせんまるのちらひかは桔
ふる本ふもそ花咲こいまの世までもとこ

和上

たかさいりにむくゆくみのり毎の
みのとさはの沛法れふ毎のさをまるの
まのはもの沛法をのくしをあり
よける

士

孔子曰文事有るの武備
ありとそ文を修とし
武を用ひるを真乃
士と云なり
君ふ仕るを侍と云
仕ひ乃と事を士と云

言葉

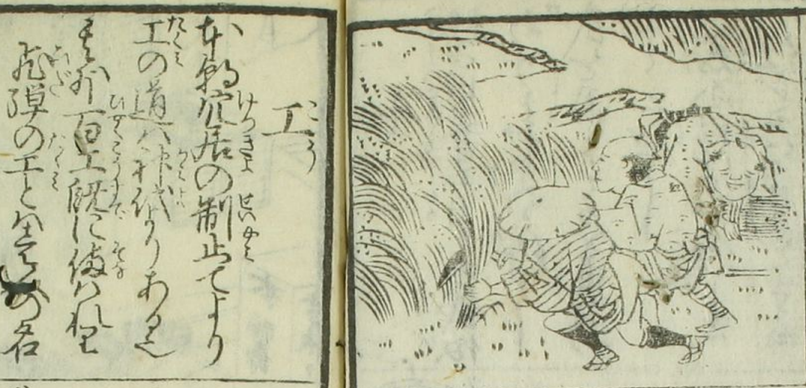
よもはをかしいとくもはるの色どもかりね
さけるもぐらこのまでの作れしかの
秋の夜ねさうげもかさぐくの菜
うれしかしかとはるくとよりう
うたる枕のはもはもるとたりへば
ひをなのまはさせば寄こめでさ

少徒

ツヨ上

岩船

金銀ちの西ざよくそふりみちそこの



農

神代より未組の理を殺
かどこしめひ給ひ国民を
いひ百姓を農民と訓び
官人のかいこふ百姓
今百姓と称するを
農民といふ是

ごとくふたとりれうらふ君を守り
れ神いちよまでさうる御代こそめで
たけれ

金机

うげいすゝ
れうとたまゝ
なりふる軒

紙 波

聖人御代よまさいでてんぐをまもり

工

かの定居の制出てより
工の道人ありけりあるを
もかの百工既に後れ
荒陸の工と生とその名
ふ沢ふ沢
上よ

れるこしるる天下をまもり世をなるで
んぜいらくぞめでたくく

老 松

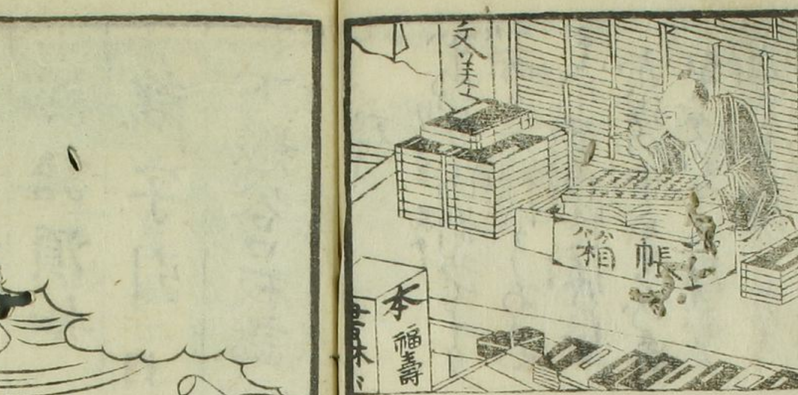
ようひをきびるこのきこれゆくを
守るとて秋神流のそげを去りたる松
風も梅もひさしくなることそめでさ
れ

養 老

よる御代ふしやくぐらんぜいのみちふ
うりるかんが歳の道ふりるかん

商

神代に夏代を命ぜ人の
道と教ふ茅葺の
威の命とやーなれりとぞ
内ふ吾こくゑ賢く
するを貫と云ふにく
うるを商と書とぞ



あしたづ
ひろもかくなくよとやのさうら
むうとうとうゆくらもとばさうか
さうゆくもるこをひさてしれ

よ杖楽

よ杖楽たみをおでぎんざいらくか
ちいのちとのばあらあひの松風さか
ふりのこゑぞたのしむ

よ猩乃猿國

畫工浪速　靖中菴桃溪

彫刻京都　醉竹堂梓

小謡童子訓　觀世流寸珎本　全一冊
宴席小謡四海浪　全一冊
萬歳小謡昇平樂　全一冊
謡語須知　全二冊
謡字引　内外　各全一冊
下懸谷口板謡　内百番全七冊　外百番全七冊
當流小謡觀世扇　全一冊
唱曲辨疑　全二冊
謡柏子筌　全一冊
能花傳書　全五冊
下懸雜謡　内外百四十番　全一冊
同酒宴小謡　半紙本　全一冊　小本　全一冊

享和二年壬戌二月發行
安政二乙卯年正月再版

發行

書肆

江戸日本橋壹丁目　須原屋茂兵衛
京都三条御幸町　吉野屋仁兵衛
尾州名古屋本町　菱屋藤兵衛
越前福井片町通　鷹屋與兵衛
伊豫松山本町壹丁目　袴屋金七
大坂心齋橋北久宝寺町　河内屋源七郎板